

ヨハネによる手紙第一4章16-18節 「全うされた愛」

1A 神の愛 16

1B 私たちに対する神の愛

2B 愛に留まる人

2A さばきの日の確信 17

1B 私たちの内にある愛

2B キリストと同じような者

3A 恐れを締め出す愛 18

1B 恐れのない愛

2B 罰が伴う恐れ

本文

ヨハネによる手紙第一 4 章を開いてください。今晚は、16-19 節に注目したいと思います。「¹⁶ 私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっておられます。¹⁷ こうして、愛が私たちにあって全うされました。ですから、私たちはさばきの日に確信を持つことができます。この世において、私たちもキリストと同じようであるからです。¹⁸ 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」

今晚のテーマは、「全うされた愛」です。私がキリスト者になって、バプテスマを授けてくださった牧師さん宅に行ったことがあります。教会堂の上、二階にありました。その階段のところだったでしょうか、掲げられていたのが 18 節の言葉でした。「**全き愛は恐れを締め出します。**」というところ です。愛というものが全き愛で、それが恐れを締め出すところが、衝撃的でした。神の愛はいとも完全で、私を完全に救うことができるのだと全き平安を得られたのを覚えています。

私たちは、しばしば「神はあなたを愛しています。」という言葉聞きます。数年前に、日本武道館に来た伝道者、フランクリン・グラハムさんは、God loves you.と何度も繰り返して話していました。「はい、はい、分かりました。何度も言わなくていいですよ。」と思ったのですが、いや、心のどこかで、神は自分を愛しているかもしれないが、自分のここ部分は愛していないだろう。そう思って、神の愛が条件付きのものだと恐れ、不安を抱えています。けれども、神の愛は完全なのです。神が愛しておられて、それは全き愛で、私たちの内に愛が全うされたのだということを学びます。

第一の手紙の流れを思い出しますと、ヨハネは 12 節で、「**私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまり、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。**」と書いていました。神の愛

が全うされることについて語り、そして神が留まってくださることについて話しています。そこで 13 節から 15 節で、神のうちに私たちが留まり、私たちが神のうちに留まることについて詳しく話しました。そして 16 節で神の愛が全うされることについて詳しく話しています。

1A 神の愛 16

1B 私たちに対する神の愛

^{16a} 私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。

私たちが「自分たちに対する神の愛を知」と言っていると、ヨハネは言っています。この知っているのは、体験して知っていること、ギノースコウを使っています。自分に対する神の愛を体験したのです。それは、9-10 節で話していました。「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって 神の愛が私たちに示されたのです。10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」御子によって命を得させてくださったこと、そして、罪のための宥めのささげ物になってくださったこと。ここに愛が示されています。

自分の罪のためにキリストが死なれた神の愛については、パウロが、人のために死ぬようなことはほとんどないことを例に出して、説き明かしています。「ロマ 5:6-8 実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでくださいました。7 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」ここに、とてつもない愛が示されています。

しかしそれだけでなく、「私たちにいのちを得させてくださいました」というところにも愛が示されているのです。ここで言っている「いのち」とは、死んだ後に天に行く命というだけではありません。いやむしろ、今、この方と結ばれていることにあるいのちであります。手紙の冒頭で、ヨハネは、自分自身がイエス様にそばにいて、じっくりと見て、触ったところに、「いのちのことば」があると言いました(1:1)。ヨハネが、肌で感じることのできる仲であって、そこにいのちがあることを話していて、この方と神秘的につながっているところに、いのちがあることを話しています。キリストと結ばれているので、キリストの愛が自分のうちにもある。キリストにある平安が自分にもある。キリストの喜びが自分にもある。キリストが父なる神に祈られた祈りも、私たちの祈りになる。パウロは、「ロマ 6:5 私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。」と言って、キリストの死と復活にも、キリストと一つになっているので、あずかっているということです。

よみがえられたイエス様は、マグダラのマリアにこう言われました。「ヨハ 20:17b わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」御子であるイエス様は、父なる神と一つとなっている特別な関係があります。そして今、弟子たちを「わたしの兄弟たち」と呼ばれて、弟子たちに、父子の関係の中に入れてくださったのです。ご自身にとって神が父であるように、彼らにとっても父となる。もちろん、神と人との大きな違いはありますが、しかし人は神のかたちに造られた者です。キリストとの結びつきによって、神とつながっているというところに、神は愛を示されています。イエス様は、祈り願いについても、そのまま父に願うことができると言われます。「ヨハ 16:26-27a その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言うものではありません。27a 父ご自身があなたがたを愛しておられるのです。」

そこでヨハネは、「**神の愛を知り、また信じています**」と言っています。初めに、知ること。次に、信じているという順番です。もちろん、信じて体験する、知るということもありますが、ここで既に信じていて知っている人々に語っています。この愛を知ったのです。そして、その愛に留まるには、信じ続けることが必要です。時に、神の愛が感じられないこと、また分からなくなることがあります。苦しい時、祈りが聞かれたように見えない時、神の愛が分からないと思います。けれども、もう神の愛を知っている者は、また、神の愛を信じ続けることができます。

2B 愛に留まる人

16^b 神は愛です。愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっておられます。

神は私たちを愛されていますが、それは神の性質以上のもの、神の本質からです。「神には愛があります。」ということがありますが、これは間違いで、「神は愛」なのです。また、このような説明がありますね、「神は愛だけではありません。聖であり義である方です。」正しいようで、ややもすると間違ったことです。神があたかも、愛する時もあれば、愛さないで義を行われることもある、という見方です。急に優しくなったと思いきや、怒りに満ちるような不安定な神のようにさえ見る人たちもいます。そうではないのです。神はどんな時も愛なのです。聖なる方が愛する方なのです。正しい方が愛する方なのです。愛さないで正しいことを示す、聖なることを示すのではないのです！金太郎飴のどこを切ってもいつまでも金太郎が出て来るように、神のどこを切っても、いつまでも愛であります。

そこで、「**愛のうちにとどまる人**」が、神にとどまっていると言っています。愛されていることを知っていて、また愛することも知っていて、そのように愛にとどまっているということは、その人が神のうちに留まっているし、また神がその人のうちに留まっています。

これだけ大きな違いがあります。その理由が、愛が全うされているからです。

2B キリストと同じような者

17b この世において、私たちもキリストと同じようであるからです。

ここで言っていることは、「キリストが世から別たれ、聖なる方であられるように、私たちはキリストに結ばれ、世から別たれている。」ということです。世を裁かれる時に、私たちはその裁きは免れる、過ぎ越すということです。だから、大胆でいられる、確信を持つことができます。

「**私たちもキリストと同じようである**」ということですが、私たちはまだキリストに似た者になっていません(3:2)。キリストが現れた時にそうなるとヨハネは言っていますが、ここでは「この世において」と言っています。これは、先に話した、キリストと一つとなっていること、結ばれていることを意味しています。

イエス様は聖霊によってマリアから生まれましたが、私たちは神の御霊によって新しく生まれ、神の子どもとなりました。イエス様は聖霊に満たされて、力強い宣教の働きを行われましたが、私たちも聖霊の力によって、イエス様を証するようになっていく。そして、イエス様が十字架につけられ、よみがえられましたが、私たちは、罪に支配された古い人が十字架につけられ、新しい人によみがえりました。そして、主が体をもってよみがえられたように、よみがえるのです。それだけではありません。主は天に昇られ、父のみもとに行かれましたが、私たちも天に引き上げられ、この方であって、天の座に着きます。そして、キリストは天から地上に戻って来られます。その時に、私たちも神の栄光のうちに現れます(コロ 3:4)。なので、私たちはキリスト者と呼ばれるのです。キリストと一つになった者なのです。

3A 恐れを締め出す愛 18

ここで大事なことは、私たちがあたかも、キリストのように偉くなったとか、霊的レベルが一段と上がったとかということではありません。全くもって、神の愛によっているのです。そこでヨハネは全き愛について話します。

1B 恐れのない愛

18a 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。

この御言葉を初めて読んだ時、衝撃でした。愛の反対語として、憎しみがよく言われます。「愛には憎しみ」がないというのであれば、なんとなく分かります。けれども、「恐れがない」と言っているのです。愛と恐れは相いれないもの、水と油の関係なのだということです。そうすると、私たちはい

かに愛のない世に住んでいるということが分かります。自分のことが人に明かされてしまうという恐れ。何よりも、神の前ですべてのことが明かされる恐れ。将来、自分がどうなるか分からないという恐れ。死に対する恐れ。私たちは、恐れで囲まれています。そして、それは愛とは裏腹だということです。

「**愛には恐れ**」がないということを知りやすく話すならば、男に愛されている女、夫に愛されて安心しきっている妻と言ったらよいでしょうか。いや、男の愛は不安定ですから(笑)、例えを変えましょう。完全に母親や父親を信頼しきって、抱かれて眠っている小さな子の姿と言ったらよいでしょう。愛されているので、恐れがないのです。「イザヤ 43:4-5 わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。・・恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。」

ここで言っている恐れは、いわゆる恐怖ということです。主を恐れ敬うという意味の恐れではありません。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。」この恐れと、恐れ敬いの違いをよく表しているのが、ルカ 12 章、イエス様が人を恐れてはいけないことを教えておられる場面です。「12:4-7 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいけません。7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。」初めに、神を恐れなさいと言われていたのに、最後は「恐れることはありません」と締めくくっておられます。前者は、恐れ敬いであり、後者はいわゆる怖い、という意味です。人をゲヘナに投げ込むことのできる権威のある畏れ多い方が、あなたの髪の毛までも数えておられるほど、守られている、ということです。

そして、恐れと愛は水と油の関係であり、「**全き愛は恐れを締め出します。**」と言っています。単なる愛ではなく、全き愛と言っているのです。これは、愛が条件付きのものではない、無条件のものであり、その徹底したお姿が、十字架につけられたキリストに表れているということです。十字架を仰ぎ見れば、自分の犯した罪で赦されていない罪は残されていない、すべてが清められてるということを知ることができます。どんなどん底に落ちても、主はもっと下のところから自分を支え、自分を引き上げてくださいます。そのような全き愛を知れば、恐れが締め出されるのです。今、いろいろな恐れに満ちている時代、不安症の時代、不安定の時代だと言えます。今、知らなければいけないのは、恐れを締め出す全き愛です。

2B 罰が伴う恐れ

18b 恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。

水と油の関係ですから、今度は恐れがあるということは、愛においては全きものとなっています。その理由がはっきりと書いていますね。「罰が伴い」とあります。自分は罰せられるのではないかという恐れを抱いているので、神の愛を受け入れていないということなのです。ある人たちは、神の刑罰を知らないから、神のところに来ないと思っているようですが、その逆です。神が恐ろしい方で、自分を罰すると思っているから、この方のところに来ないのです。主が、罪を犯した後のアダムとエバのいる園の行かれた時に、どうしてアダムとエバは退いたのですか？神に自分たちの姿を見られて、罰せられると恐れたのです。

人が神に近づくには、神がありのままの自分を受け入れ、その罪を赦し、清めてくださることを知って、その愛に感動し、へりくだって悔い改めるから、近づくことができるのです。「ヘブル 10:38-39 わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」39 しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」恐れると、神から退いてしまいます。そして、退けば滅んでしまいます。そうではなく、愛する父、愛する主人であることを知って、信じることによって生きるのです。タラントの喩えを思い出してください。5タラントを任せられたしもべ、2タラントを任せられたしもべは、それぞれ 10 タラント、5 タラントをもうけました。1タラント任せられたしもべは、地の中に隠しました。主人に問い詰められた時に、弁解しています。「マタ 25:24-25 ご主人様。あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかつたところからかき集める、厳しい方だと分かっていました。25 それで私は怖くなり、出て行って、あなた様の一タラントを地の中に隠しておきました。ご覧ください、これがあなた様の物です。」神が酷い方、恐ろしい方だとして、神に不信を抱き、この方に関わりたくないと思って、それで任せられたものに関わりたくなかつたのです。

これが不信者の姿だと言ってよいです。信じている者たちでも、この恐れ退きの過ちがあります。恐れによって大胆に信仰を持てなくなって、それで信仰的に後退してしまうのです。だから、ヨハネは何度となく、愛が全うされたのだということを話しています。そして、神の愛、イエス様にある愛に留まることの必要性を教えています。そこに留まれば、神が留まってくださいます。つまり、どんな試練があっても、それで神に切り離されないことを知っているのです。「ロマ 8:35-37 だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。36 こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」37 しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。」